

カウンセラーの Self-involving, Self-disclosing が 被開示者の印象評価と自己開示に与える影響

* 田 中 健史朗 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

** 廣 瀬 幸 市 (愛知教育大学大学院教育学研究科)

Influence of self-involving and self-disclosing counselor statements on the impressions of the counselor and anticipated self-disclosure to the counselor

* Kenshiro TANAKA (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

** Koichi HIROSE (Graduate School of Education, Aichi University of Education)

要約 本研究では、カウンセラーの自己開示を、Self-involving と Self-disclosing の2種類に分け、被開示者のカウンセラーに対する印象評価と自己開示に与える影響を検討した。その方法として、大学生、大学院生208名を対象とした。調査協力者を Self-involving 群と、Self-disclosing 群、統制群の3群に分け、カウンセリング場面の逐語を読んでもらった。そして、その逐語のカウンセラーに対する印象の評価と自己開示を質問紙で尋ねた。その結果、Self-involving は、カウンセラーに対する専門性を媒介として被開示者の表面的自己開示および内面的自己開示を促進することが示された。一方、Self-disclosing は、カウンセラーに対する好意感を高める影響があるが、信頼感を抑制する影響があることが示された。

Keywords : self-involving statements, self-disclosing statements, 印象評価, 自己開示

I 問題と目的

1. カウンセラーの自己開示

自己開示は、臨床心理学者である Jourard によって心理学的研究の対象とされ、「個人的な情報を他者に知らせる行為」と定義されている (Jourard, 1971)。カウンセラーの自己開示が心理臨床場面において有用な介入になりうるか否かについては賛否両論あり、議論が行われてきている (e.g., Farber, 2006; Henretty & Levitt, 2010; Vavrinak & Lunnen, 2012)。自己開示の提唱者である Jourard (1971) は、カウンセラーの透明性、自己開示性こそ良い治療関係において重要であり、クライアントの自己開示を促進できると述べている。一方、従来の精神分析理論において、カウンセラーの自己開示は「分析の隠れ身」という原則から逸脱する行為とみなされており、カウンセラーが自己開示することで、クライアントが自由に心的内容を投影できなくなるとされている (Reich, 1960; Streaun, 1988)。しかし、同じ精神分析理論の立場の中であっても、Greenberg (1995) や Renik (1995) は、カウンセラーの中立性と匿名性という概念は臨床的現実にはそぐわず、カウンセラーの自己開示は自然に起きてしまう」と指摘している。このように、心理臨床におけるカウンセラーの自己開示については今もなお様々な議論がなされている。

カウンセラーの自己開示についての研究は、アメリカを中心に1970年ごろから盛んに行われるようになってきた。その中で、自己開示するカウンセラーは、自己開示しないカウンセラーに比べ、クライアントから好意的に評価されること、暖かい印象を与えること、カウンセラーとクライアントの関係性を良くすることが示されている (e.g., Audet & Everall, 2003; Barrett & Berman, 2001; Simonson, 1976)。また、カウンセラーが自己開示することで、クライアントの自己開示が促されるという結果が多くの研究で見出されている (e.g., Derlega, Lovell, & Chaikin, 1976; Farber, 2006)。以上のように、カウンセラーの自己開示の研究は海外では盛んに行われている。しかし、日本においてはカウンセラーの自己開示について扱っている研究は少なく、1990年代になり議論がなされるようになってきた。岡野 (1997) は、カウンセラーが自己を示すことで、患者が自己をさらすことに対する恥の感覚が弱まり、自由連想がさらに進む可能性があるなど治療に自己開示を用いる有用性を示している。また遠藤 (2000) は、クライアントの病態水準ごとにカウンセラーの自己開示の有効性を示しており、“治療関係を的確に把握できている状況下で、カウンセラーが逆転移の由来を十分に探索し、開示すべき内容とそのタイミングを慎重に選んだ場合は、臨床的に有用な介入になる”と述べている。このように、日本においても

カウンセラーの自己開示の有用性に関して議論が行われるようになってきた。しかし、海外ほど盛んには行われていない。カウンセラーの自己開示の効果に関しては、社会的背景や文化の影響を受けることが見出されている (Constantine & Kwan, 2003)。そのため、海外の研究が日本において適応できるとは限らず、日本においてもカウンセラーの自己開示についての研究を行う必要があると考えられる。Greenberg (1995) が述べているようにカウンセラーの中立性、匿名性という概念は臨床場面にはそぐわず、カウンセラーの自己開示は自然に起きてしまう。そのため、カウンセラーの自己開示がクライアントに及ぼす影響を把握しておかなければ、自然に起きた自己開示でクライアントを傷つける危険性があるだろう。岡野 (1997) も、不可避的な自己開示を積極的に自覚した上で行うことでカウンセラーが自己を利用することは有用であると述べている。このように、日本においても有用性が論じられているが、その際にはカウンセラーの自己開示についてカウンセラー自身がその影響力を理解しておく必要があると考えられる。遠藤 (2000) も同様に、カウンセラーの自己開示の有用性を論じる中で、カウンセラーの自己開示について深く把握しておくことを条件としている。そのため、本研究ではカウンセラーの自己開示がクライアントに及ぼす影響を検討する。

2. Self-involving と Self-disclosing

カウンセラーの自己開示研究の中で、カウンセラーが自己開示を行うことでクライアントの自己開示を促進したり、印象を肯定的に評価されたりといったポジティブな影響を与えることが示されてきた (Audet & Overall, 2003; Barrett & Berman, 2001; Simonson, 1976)。しかし一方で、カウンセラーが自己開示を行うことでクライアントの自己開示が抑制されたり、印象を否定的に評価されたりするというネガティブな影響を与えるという結果や、ポジティブにもネガティブにも特に影響を与えないという結果もみられている (Myers & Hayes, 2006)。このように、一貫した結果が得られていないのは、開示内容が異なるためではないかという指摘がなされ、カウンセラーの自己開示を種類分けして検討する流れとなっている (Bloomgarden & Mennuti, 2009)。その中で、カウンセラーの自己開示を Self-involving と Self-disclosing に分けて検討することが主流となっている (Vavrinak & Lunnen, 2012)。Self-involving とは、クライアントの話に対して湧きおこったカウンセラーの感情や反応を伝える開示である。この開示は、会話の焦点がクライアントにより強く焦点づけられること (Reynolds & Fischer, 1983) や、カウンセラーに対する専門性、信頼感の評価が高まることが示されている (McCarthy & Betz, 1978)。一方、Self-disclosing とは、カウンセラーの個人的な経験や体験を伝える開示であり、カ

ウンセラーの自己開示として一般的にイメージされるものである。この開示を行うことで会話の焦点がクライアントからカウンセラーに移ってしまうこと (Reynolds & Fischer, 1983) や、カウンセラーに対する専門性と信頼感の評価が下がってしまうことが示されている (Curtis, 1981)。このように、同じカウンセラーの自己開示であっても、開示内容が Self-involving であるか、Self-disclosing であるかによって、クライアントに与える影響が異なると考えられる。そのため、本研究ではカウンセラーの自己開示がクライアントに及ぼす影響を検討する際に、カウンセラーの自己開示を Self-involving と Self-disclosing の 2 種類に分けて検討する。

3. カウンセラーの自己開示の有用性の指標

カウンセラーの自己開示がクライアントにとって有用であるのかを検討する指標として、クライアントのカウンセラーに対する印象の評価と自己開示が考えられる (Simonson, 1974; Watkins & Schneider, 1989)。まずクライアントのカウンセラーに対する印象について、岡野 (1997) は、クライアントがカウンセラーのことをポジティブに評価することで陽性転移が促進されると述べている。クライアントのカウンセラーに対する印象の評価がポジティブになることで、クライアントが安心できたり、カウンセラーとのラポートを形成できたりすることが考えられる。また、自己開示を行うことは、ストレス低減機能があること (丸山・今川, 2001) や抑うつ感が軽減したり、身体的にも健康になったりすることが見出されている (Pennebaker & Beall, 1986)。そのため、多くの心理学者や健康の専門家がストレス低減という観点から身体的・精神的健康を促進させる方法として自己開示を推奨している (Jessica, John, & Jacquie, 2009)。そこで、本研究では、カウンセラーの自己開示がカウンセリング場面において有用であるか否かの指標として、被開示者のカウンセラーに対する印象評価と自己開示を取り上げる。

4. 本研究の目的

本研究では、カウンセラーの自己開示が被開示者の印象評価と自己開示に及ぼす影響について検討することを目的とする。その際、カウンセラーの自己開示を Self-involving と Self-disclosing の 2 種類に分けて検討する。その方法として、本研究では調査協力者にカウンセリング場面の逐語を読んでもらい、そのカウンセラーに対する印象の評価と、そのカウンセラーに対して自己開示をどの程度するのかを質問紙で尋ねる。研究の方法として、実際に調査協力者に面接を行うという方法や調査協力者に面接場面の映像をみせたり、音声を開かせたりという方法も考えられる (Andersen & Anderson, 1985; Hoffman-Graff, 1977; McCarthy, 1979)。しかし、本研究では、カウンセラーの自己開

示がカウンセラーに対する印象や自己開示に与える影響を、量的手法を用いて検討すること目的としている。そのため、多くのデータを集める必要がある。また、Andersen & Anderson (1985) は、調査協力者にカウンセリング場面の映像をみせることと音声聞かせること、逐語を読ませることでは、調査協力者のカウンセラーに対する印象評価に有意な差がないことを見出している。そのため、本研究では、逐語を用いた方法を採用する。

II 方法

1. 調査協力者

Z県内の国立大学生、大学院生、Y県内の国立大学生を対象とし、調査協力者数は215名（男性108名、女性107名）であった。このうち回答に不備があった者を除いた208名（男性103名、女性105名）を分析対象とした（平均年齢19.5歳）。群ごとの分析対象数は、Self-involving群が70名（男性32名、女性38名）、Self-disclosing群が70名（男性37名、女性33名）、統制群が68名（男性34名、女性34名）であった。

2. 調査時期

2011年11月中旬

3. 手続き

授業において質問紙を配布し、その場で回答を求め回収する一斉配布、一斉回収方式で実施した。

4. 調査内容

調査協力者をカウンセラーがSelf-involvingを行っている逐語を読むSelf-involving群、カウンセラーがSelf-disclosingを行っている逐語を読むSelf-disclosing群、カウンセラーが自己開示を抑制している逐語を読む統制群の3群に分けた。そして、調査協力者には、それぞれ割り当てられたカウンセリング場面の逐語を読んでもらった。その後、そのカウンセラーに対する印象評価と、そのカウンセラーに対して自己開示をどの程度するかを質問紙で尋ねた。本調査で用いた逐語文章については、第一筆者および共同筆者、大学院生1名で検討し、作成した。本研究で用いた尺度を以下に示す。

(1) カウンセラーの印象の評価：カウンセラーの印象を評価するため、Corrigan & Schmidt (1983) のCounselor Rating Form-Short version 12項目を日本語に翻訳して使用した。この12項目に対して、逐語のカウンセラーがどの程度当てはまるかということ「1 全く当てはまらない」、「2 あまり当てはまらない」、「3 どちらともいえない」、「4 やや当てはまる」、「5 非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた。

(2) カウンセラーへの自己開示量：カウンセラーへの自己開示量を測定するため、飯長 (1977) の自己開示質問紙40項目を使用した。この40項目に対して、逐語のカ

ウンセラーに対してどの程度自己開示すると思うかということ「1 全く開示しない」、「2 あまり開示しない」、「3 どちらともいえない」、「4 やや開示する」、「5 たくさん開示する」の5件法で回答を求めた。
(3) カウンセラーの自己開示：Self-involving群、Self-disclosing群、統制群の3群の逐語が実際に3群で調査協力者の認知するカウンセラーのSelf-involving、Self-disclosingに違いがあったかを検討するため、逐語のカウンセラーがSelf-disclosing（「自分の過去の情報や歴史を開示していると思う」）、Self-involving（「Aさんの話を聞いていて、自分の中に湧いてきた感情や反応を開示していると思う」）をどの程度行っているかを「1 全くあてはまらない」、「2 あまりあてはまらない」、「3 どちらともいえない」、「4 ややあてはまる」、「5 非常にあてはまる」の5件法で回答してもらった。

III 結果

1. 尺度構成と尺度の信頼性

(1) カウンセラーの印象評価尺度

Counselor Rating Form-Short version (CRF-S) 12項目について、まず各項目の平均値と標準偏差から天井効果、床効果の検討を行ったところ、いずれの項目についてもそれらはみられなかった。次に、12項目について最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。解釈可能性の観点から3因子解を採用した。全ての因子に.35以下の負荷や、複数の因子に.35以上の負荷を示した項目を除外しながら、同じ手続きで分析を繰り返し行った。1項目を除外したところ、Table 1に示すような因子負荷量となった。第1因子は、「親しみやすいと思う」、「好感が持てると思う」、「愛想が良いと思う」、「温かみを感じる」の4項目から構成されていた。カウンセラーの魅力や好意に関する内容であったため、「好意感」と命名した。第2因子は、「経験が豊かだと思う」、「専門的知識を持っていると思う」、「しっかりしていると思う」、「熟練されていると思う」、「頼りになると思う」の5項目から構成されていた。カウンセラーの専門性に関する内容であったため、「専門性」と命名した。第3因子は、「偽りが無いと思う」、「信用できると思う」の2項目から構成されていた。カウンセラーへの信頼に関する内容であったため、「信頼感」と命名した。そして、各因子について下位尺度ごとの点数を足し合わせて項目数で割った値を下位尺度得点とした。各下位尺度の平均値、標準偏差は、Table 1にあわせて示す。次に尺度の信頼性の検討のため下位尺度ごとに α 係数を算出した。その結果、好意感は $\alpha = .826$ 、専門性は $\alpha = .900$ 、信頼感 $\alpha = .688$ であり、それぞれ十分な値が得られた。

Table 1 CRF-S の因子分析結果

	I	II	III
＜好意感＞平均 3.01, 標準偏差 .95			
5. 親しみやすいと思う	.98	-.13	-.01
6. 好感が持てると思う	.82	.03	.16
7. 愛想が良いと思う	.81	.05	-.15
8. 温かみを感じる	.67	.15	.05
＜専門性＞平均 2.98, 標準偏差 0.74			
10. 頼りになると思う	-.20	.82	.20
4. 熟練されていると思う	.04	.81	-.20
3. しっかりしていると思う	.15	.70	-.03
2. 専門的知識を持っていると思う	-.03	.57	-.02
1. 経験が豊かだと思う	.21	.54	-.02
＜信頼感＞平均 3.07, 標準偏差 0.82			
11. 偽りが無いと思う	-.05	-.14	.86
12. 信用できると思う	.13	.22	.59
因子間相関			
I	-	.61	.38
II		-	.45
III			-

注) 太字は因子負荷量が .35以上

(2) 自己開示質問紙

自己開示質問紙40項目について、まず各項目の平均値と標準偏差から天井効果、床効果の検討を行ったところ、いずれの項目についてもそれらはみられなかった。次に、40項目について最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。解釈可能性の観点から2因子解を採用した。全ての因子に .35以下の負荷や、複数の因子に .35以上の負荷を示した項目を除外しながら、同じ手続きで分析を繰り返し行った。3項目を除外したところ、Table 2に示すような因子負荷量となった。第1因子は「自分の受け入れたくない思想について」、「自分は未熟だ、バカだなあと感じるのとはどういふときかについて」、「自分の恋人や配偶者の気に入らないところについて」などの22項目から構成されていた。飯長（1977）が内面性の高い自己開示内容としていた項目が82%を占めていたため、「内面的自己開示」と命名した。第2因子は、「どんな所へ旅行したいか」、「どんな色が好きか」、「学校ではどんなクラブに属しているか（いたか）」などの15項目から構成されていた。飯長（1977）が内面性の低い自己開示内容としていた項目が87%を占めていたため、「表面的自己開示」と命名した。そして、各因子について下位尺度ごとの点数を足し合わせて項目数で割った値を下位尺度得点とした。各下位尺度の平均値、標準偏差は、Table 2にあわせて示す。次に尺度の信頼性の検討のため下位尺度ごとに α 係数を算出した。その結果、内面的自己開示は $\alpha = .927$ 、表面的自己開示は $\alpha = .941$ であり、それぞれ十分な値が得られた。

Table 2 自己開示質問紙の因子分析結果

項目内容	I	II
＜内面的自己開示＞平均 2.66, 標準偏差 0.75		
36. 価値観の違う人と結婚することについて自分は思うか	.86	-.07
39. 自分は未熟だ、バカだなあと感じるのとはどういふときかについて	.85	-.23
38. やらなければならぬのに、やりたくない勉強（仕事）について	.81	-.10
37. 自分が受け入れたくない思想について	.80	-.13
40. 人間にとって教育はどのくらい重要だと思っているかについて	.78	-.02
35. 自分のした進路選択をどう思っているか	.76	-.08
31. 自分の勉強（仕事）をする上でハンディに思っていることについて	.70	.05
33. 自分の勉強（仕事）から、どんな満足を得ているか	.70	.08
26. 女性差別について自分は思うか	.69	.06
29. 浮気についてどう思うか	.68	.08
24. 自分の学歴についてどう思っているか	.66	.01
28. 自分の恋人や配偶者の気に入らないところについて	.65	.07
18. 自分をこういふふうで育てた両親への不満	.65	-.04
30. どれくらい貯金しているか	.56	-.02
13. 最近の性風俗についてどう思っているか	.53	.06
6. 学校の先生をどう思っているか	.51	.24
25. 一人で何かやるのと、みんなでやるのと自分は主にどちらが好きか	.50	.22
11. 現在自分はどれくらい収入を得ているか	.46	.11
19. 異性に対してどういふ点に魅力を感じるか	.44	.28
23. いくらくらい借金をしたことがあり、その借りた相手は誰か	.42	.05
7. 自分が今どういふ宗教的活動を行っているか	.41	.19
4. 今まで異性を好きになったことがあるか	.37	.25
＜表面的自己開示＞平均 3.35, 標準偏差 0.76		
15. 自分の好きなテレビ番組について	-.06	.81
21. 好きな歌手、俳優、スポーツ選手は誰か	-.09	.81
9. 自分が一番好きな映画について	-.07	.78
5. どんなスポーツを観戦するのが好きか	-.10	.73
17. どんなお酒が好きか（ビール、ウィスキー、日本酒など）	-.12	.72
1. 好きな音楽、嫌いな音楽について	-.04	.69
32. どんな色が好きか	-.06	.68
3. どんなスポーツをやっているか、やったことがあるか	-.08	.67
34. どんな所へ旅行したいか	.03	.64
14. 自分の好きな食物、嫌いな食物について	.11	.61
20. 自分の特技、余技、趣味、資格、コレクションについて	.19	.56
12. 自分の一番好きな娯楽について	.17	.55
27. 自分の生まれた町はどこか	.16	.54
10. 高校時代の一番楽しかった思い出について	.19	.54
16. 学校ではどんなクラブに属しているか（いたか）	.14	.49
因子間相関		
I	-	.62
II		-

注) 太字は因子負荷量が .35以上

2. 逐語の適切性の検討

Self-involving 群, Self-disclosing 群, 統制群の3群の逐語が実際に3群で調査協力者の認知するカウンセラーの Self-involving, Self-disclosing に違いがあったかを検討するため、調査協力者が逐語を読んで評定したカウンセラーの Self-involving, Self-disclosing の得点を従属変数とした1要因3水準の分散分析を行った (Table 3)。その結果、カウンセラーの Self-involving 得点 ($F(2, 205) = 20.36, p < .001$)、Self-disclosing 得点 ($F(2, 205) = 58.28, p < .001$) のどちらにおいても有意な差がみられた。そのため、Scheffe 法を用いた多重比較を行った結果、カウンセラーの Self-involving の得点は Self-disclosing 群と統制群よりも Self-involving 群が有意に高かった。また、カウンセラーの Self-disclosing の得点は Self-involving 群と統制群よりも Self-disclosing 群が有

意に高かった。このことから、Self-involving 群の逐語は他の2群と比較するとカウンセラーのSelf-involvingが多く、Self-disclosing 群は他の2群と比較するとカウンセラーのSelf-disclosingが多いことが認められたため、逐語が適切であったことが示された。

Table 3 カウンセラーの自己開示得点

	S-i群 (n=70)	S-d群 (n=70)	統制群 (n=68)
	Mean	Mean	Mean
Self-involving	3.31 (1.11)	2.49 (0.81)	2.24 (1.17)
Self-disclosing	1.79 (0.88)	3.41 (1.15)	1.90 (0.93)

() 内は標準偏差

注) S-iはSelf-involving, S-dはSelf-disclosingの略

3. Self-involving, Self-disclosing の影響

カウンセラーのSelf-involving, Self-disclosingがカウンセラーに対する印象評価や自己開示の促進に与える影響を検討するため、カウンセラーのSelf-involving, Self-disclosingを独立変数、カウンセラーに対する印象評価を媒介変数、調査協力者の自己開示を従属変数とした共分散構造分析を行った。その際、カウンセラーのSelf-involvingとSelf-disclosingの2つのダミー変数を設定した。Self-involving 群には、Self-involvingの得点を「1」、Self-disclosingの得点を「0」というダミーコードを与えた。統制群には、Self-involvingの得点を「0」、Self-disclosingの得点を「0」というダミーコードを与えた。カウンセラーのSelf-involving, Self-disclosingからカウンセラーに対する印象評価の下位尺度得点である好意感、専門性、信頼感のそれぞれの変数へのパスと、カウンセラーに対する印象評価の各下位尺度得点から内面的自己開示と表面的自己開示のそれぞれへのパスを想定した。また、カウンセラーに対する印象とカウンセラーに対する自己開示には、クライアントがイメージしたカウンセラーの性別や容姿も影響していると考えられる(Casciani, 1978; Cash, Kehr, Polysen, & Freeman, 1977)。そのため、カウンセラーに対する印象と自己開示への誤差に共分散を仮定したモデルとした。その結果、モデルの適合度は $\chi^2=1.42$ ($p=.84, n.s.$), GFI=.998, AGFI=.986, CFI=1.00, RMSEA=.000となり、十分な適合度のあるモデルだと判断したため、このモデルを採用した(Figure 1)。また、Figure 2に有意なパスのみのモデルを示した。カウンセラーのSelf-involvingからは好意感へ正の影響を与える傾向がみられ、また専門性へ正の影響を与えることが示された。カウンセラーのSelf-disclosingからは好意感へ正の影響を与え、信頼感へは負の影響を与えることが示された。カウンセラーに対する専門性の評価から

は、内面的自己開示と表面的自己開示へ正の影響を与えることが示された。カウンセラーに対する信頼感の評価からは、表面的自己開示へ正の影響を与える傾向がみられ、また内面的自己開示へ正の影響を与えることが示された。

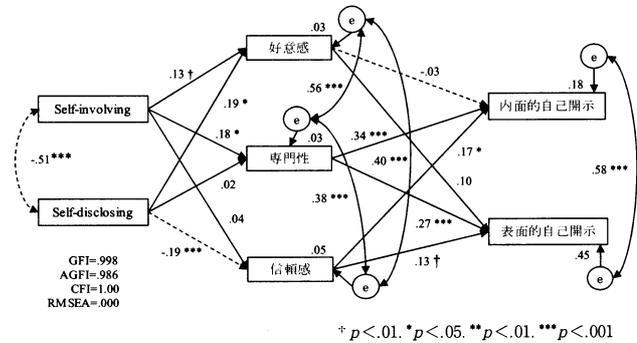


Figure 1 共分散構造分析の結果

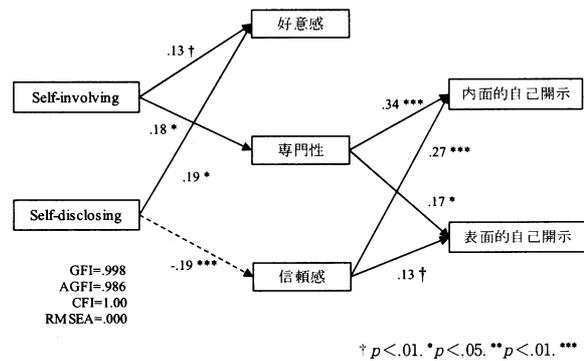


Figure 2 有意なパスのみの結果

IV 考察

1. カウンセラーに対する印象に与える影響

クライアントの話に対して湧きおこったカウンセラーの感情や反応などを伝える今現在に焦点を当てた開示であるSelf-involvingは、クライアントのカウンセラーに対する好意感の印象に直接正の影響を与えていた。また、カウンセラーの個人的な経験や歴史などを伝える過去に焦点を当てた開示であるSelf-disclosingは、クライアントのカウンセラーに対する好意感の印象に直接正の影響を与えていた。このことから、カウンセラーが自己開示を行うことで、クライアントのカウンセラーに対する好意感を高めることが示された。特に、Self-disclosingは、より好意感への影響が強かった。Jourard (1959)は、相手から個人的な情報である自己開示を受けたということで自分が信頼されている証拠だとみなされやすく、その結果、相手に対する好意が生じると述べている。この結果は、

このことを支持する結果であった。

また、クライアントの話に対して湧き起こったカウンセラーの感情や反応などを伝える今現在に焦点を当てた開示である Self-involving は、クライアントのカウンセラーに対する専門性へ直接正の影響を与えていた。これはカウンセラーが Self-involving を行うことで、クライアントのカウンセラーに対する専門性の評価が高まるということである。岡野 (1997) は、カウンセラーの心的内容や患者に対する感情的な反応自体が、患者の心の映し返しとしての意味を持ち、それを患者に示すことは、それがあからさまな「示唆」や押しつけとなるのを避けるならば、積極的な解釈技法としての意味を持つと述べている。Self-involving を用いることで、クライアントは日常では体験できない自己内省や自己洞察が進むことを体験し、カウンセラーのことを有能であるとか熟達していると認知すると考えられる。そのため、カウンセラーの Self-involving はクライアントのカウンセラーに対する専門性の評価を高める影響を与えたと考えられる。

さらに、カウンセラーの個人的な経験や歴史などを伝える過去に焦点を当てた開示である Self-disclosing は、信頼感へ直接負の影響を与えていた。カウンセラーが Self-disclosing を行うことで、クライアントのカウンセラーに対する信頼感の評価が低まるということである。カウンセラーの個人的な情報を開示することはクライアントに自らの弱点をあらわにすることであり、そのことでクライアントの信頼を失うとされている (Curtis, 1981)。このことから、カウンセラーが弱点をあらわにすることにより、クライアントはカウンセラーに対して、このカウンセラーは弱さを持っており、頼りにならないかもしれないという感情が湧き起こり、そのことでカウンセラーに対する信頼感を低く評価したと考えられる。本研究の結果から、Self-disclosing は、好意感を高めるが、信頼感を低める作用があることが示された。個人的な体験をカウンセラーが開示することで、クライアントとの距離が近くなる一方で、距離が近くなることで専門家という認識が軽減するのかもしれない。つまり、友人関係に近い状態となり、専門家としての信頼感は軽減するのかもしれない。

2. 自己開示への影響

カウンセラーの Self-involving, Self-disclosing は、カウンセラーに対する印象を媒介として間接的に被開示者の自己開示に影響を与えていた。これは Jourard (1959) が示しているように、自己開示を受けると開示者に対する印象に影響を与え、そのことで自己開示が促進されるということをサポートするものであった。特に、内面性の高い自己開示は、カウンセラーに対する信頼感と専門性の評価を媒介して影響を与えていた。自己開示の心理的抑制要因には、相手が自己開

示をどのように受け取られるのかという不安がある (榎本, 1997)。その不安は、内面性の高い開示内容であれば、さらに強くなると考えられる。そのため、カウンセラーに対する信頼感や専門性を高く評価することで、内面的な自己開示を促進させると考えられる。カウンセラーに対する専門性の評価には、Self-involving が正の影響を与えていた。一方で、Self-disclosing は、内面的自己開示を促進するカウンセラーに対する信頼感に負の影響を与えていた。このことから、クライアントの内面的な自己開示を促進させるためには、クライアントの会話の中でカウンセラーに湧き起こってきた感情を開示する Self-involving が有用であることが示唆された。カウンセラーの Self-involving には、クライアントのカウンセラーに対する印象を媒介として、クライアントの内面的な自己開示を促進する機能があるのかもしれない。

3. まとめ

本研究では、カウンセラーの自己開示を、今現在のクライアントとの会話の中でカウンセラーに湧き起こってきた感情を開示する Self-involving とカウンセラーの過去の個人的な情報を開示する Self-disclosing の 2 種類に分け、被開示者のカウンセラーに対する印象評価と自己開示に与える影響を検討した。その結果、同じカウンセラーの自己開示であっても、Self-involving と Self-disclosing では影響に違いがみられた。Self-involving は、カウンセラーの好意感と専門性を高め、専門性を媒介として被開示者の自己開示を促進することが示された。一方、Self-disclosing は、カウンセラーに対する好意感を高めるが、同時に信頼感を低減させることが明らかになった。

V 本研究の課題と今後の展望

本研究では、カウンセラーの自己開示を Self-involving と Self-disclosing に分けて検討した。中村 (1985) は、自己開示の情報要因として内面性、望ましさ、情報の量を挙げている。また、Remer, Roffey, & Buckholtz (1983) は、Self-involving の開示内容をポジティブとネガティブに分けて検討している。その結果、ポジティブな内容であるのかネガティブな内容であるのかによっても、クライアントに与える影響に違いがあることを明らかにしている。このことから、カウンセラーの自己開示情報の内面性や社会的望ましさによっても、クライアントに与える影響に違いがあることが考えられる。そのため、今後は、Self-involving, Self-disclosing の内面性や社会的望ましさについても詳細に検討する必要があるだろう。

また、中村 (1985) は、開示事態の要因として、開示を行う際の脈絡や開示者と被開示者の関係性、開示のタイミングを挙げている。Derlega & Chaikin

(1975)は、カウンセラーの自己開示には、タイミングが重要な要因となると述べている。さらに、葛西・徳永(2003)は、カウンセラーの自己開示のタイミングについて、クライアントの話を十分に聞いた後が効果的であると述べている。このように、カウンセラーの自己開示のタイミングの重要性が示されている。このことから、今後はカウンセラーの自己開示のタイミングがクライアントに及ぼす効果についても検討する必要があるだろう。

また、遠藤(2000)は、カウンセラーの自己開示の治療的意義をクライアントの病態水準によって分け、考察している。その中で、クライアントの病態水準によって、カウンセラーの自己開示が持つ意味や効果に違いがあると述べている。さらに、中村(1985)は、相手から受けた自己開示が被開示者にどのように影響を与えるかの要因として、被開示者の対人指向性など被開示者の個人差要因を挙げている。つまり、カウンセラーの自己開示をどのように認知するかは、開示を受けたクライアントの要因の影響もあるということである。このことから、クライアントの病態水準ごとにカウンセラーのSelf-involving, Self-disclosingの影響を検討していく必要があるだろう。そのことで、より臨床場面に沿った議論につながるだろう。

最後に、本研究では、研究方法として、調査協力者にカウンセリング場面の逐語を読んでもらった。逐語は、5分程度の面接の逐語であり、実際の面接を継続的に行った結果ではない。そのため、より臨床場面に近いように実際の面接を継続的に行うという方法でカウンセラーのSelf-involving, Self-disclosingがクライアントに及ぼす影響について検討していく必要があるだろう。

<付記>

本論文は、愛知教育大学大学院教育学研究科の廣瀬幸市先生にご指導いただき、愛知教育大学大学院教育学研究科学校教育臨床専攻の平成23年度修士論文として提出したものに加筆・修正を行ったものである。

文献

- Andersen, B., & Anderson, W. (1985). Client Perceptions of Counselors Using Positive and Negative Self-involving Statements. *Journal of Counseling Psychology*, **32**, 462-465.
- Audet, C., & Everall, R. D. (2003). Counselor self-disclosure: Client informed implications for practice. *Counseling and Psychotherapy Research*, **3**, 223-231.
- Barrett, M. S., & Berman, J. S. (2001). Is psychotherapy more effective when therapists disclose information about themselves? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **69**, 597-603.
- Bloomgarden, A., & Mennuti, R. B. (2009). *Psychotherapist Revealed: Therapists Speak about Self-Disclosure in Psychotherapy*. New York: Routledge Press.
- Casciani, J. M. (1978). Influence of model's race and sex on interviewees' self-disclosure. *Journal of Counseling Psychology*, **25**, 435-440.
- Cash, T. F., Kehr, J., Polysen, J., & Freeman, V. (1977). Role of physical attractiveness in peer attribution of psychological disturbance. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **45**, 987-993.
- Constantine, M. G., & Kwan, K. L. (2003). Cross-cultural considerations of therapist self-disclosure. *Journal of Clinical Psychology*, **59**, 581-588.
- Corrigan, J. D., & Schmidt, L. D. (1983). Development and Validation of Revisions in the Counselor Rating Form. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 64-75.
- Curtis, J. M. (1981). Indications and counter indications in the use of therapist's self-disclosure. *Psychological Reports*, **49**, 499-507.
- Derlega, V. J., & Chaikin, A. L. (1975). *Sharing intimacy*. Englewood Cliffs, N. J. PrenticeHall.
- Derlega, V. J., Lovell, R., & Chaikin, A. L. (1976). Effects of therapist disclosure and its perceived appropriateness on client self-disclosure. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 866.
- 遠藤裕乃(2000). 逆転移の活用と治療者の自己開示 神経症・境界例・分裂病治療の比較検討を通して 心理臨床学研究, **18**, 487-498.
- 榎本博明(1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房.
- Farber, B. A. (2006). *Self-disclosure in Psychotherapy*. New York: Guilford Press.
- Greenberg, M. (1995). Self-disclosure: Is it psychoanalytic? *Contemporary Psychoanalysis*, **31**, 193-205.
- Henretty, J. R., & Levitt, H. M. (2010). The role of therapist self-disclosure in psychotherapy: A qualitative review. *Clinical Psychology Review*, **30**, 63-77.
- Hoffman-Graff, M. A. (1977). Interviewer Use of Positive and Negative Self-Disclosure and Interview-Subject Sex Pairing. *Journal of Counseling Psychology*, **24**, 184-190.
- 飯長喜一郎(1977). グループ合宿における自己開放性 東京大学教育学部紀要, **17**, 77.
- Jessica, J. C., John, G. H., & Jacque, D. V. (2009). When self-disclosure goes awry: Negative consequence of revealing personal failures for lower self-esteem individual. *Journal of*

- Experimental Social Psychology*, **45**, 217-222.
- Jourard, S. M. (1959). Self-disclosure and other-cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **54**, 428-431.
- Jourard, S. M. (1971). *The transparent self*. New York; D. Van Nostrand. 岡堂哲雄訳 (1974). 透明なる自己 誠信書房.
- 葛西真記子・徳永啓牟 (2003). カウンセラーの「適切な自己開示」に関する研究 鳴門教育大学研究紀要 教育科学編, **18**, 67-75.
- 丸山利弥・今川民雄 (2001). 対人関係の悩みについての自己開示がストレス低減に及ぼす影響 対人社会心理学研究, **1**, 107-118.
- McCarthy, P. R. (1979). Differential Effects of Self-disclosing Versus Self-involving Counselor Statements Across Counselor-Client Gender Pairings. *Journal of Counseling Psychology*, **26**, 538-541.
- McCarthy, P. R., & Betz, N. E. (1978). Differential effects of Self-disclosing versus Self-involving counselor statements. *Journal of Counseling Psychology*, **25**, 251-256.
- 中村雅彦 (1985). 対人魅力の規定因としての自己開示 名古屋大学教育学部紀要, **32**, 201-213.
- 成田善弘 (2002). 精神分析家の仕事: 治療者の介入—その2— 共感・解釈・自己開示 臨床心理学, **2**, 240-247.
- Myers, D., & Hayes, J. A. (2006). Effects of therapist general self-disclosure and countertransference disclosure on ratings of the therapist and session. *Psychotherapy: Theory, Research, Training*, **43**, 173-185.
- 岡野憲一郎 (1997). 「治療者の自己開示」再考—治療者が「自分を用いる」こと— 精神分析研究, **41**, 121-127.
- Pennebaker, J. W., & Beall, S. K. (1986). Confronting a traumatic event: Toward an understanding of inhibition and disease. *Journal of abnormal psychology*, **95**, 274-281.
- Reich, A. (1960). Further remarks on countertransference. *International Journal of Psychoanalysis*, **41**, 389-395.
- Renik, O. (1995). The ideal of the anonymous analyst and the problem of self-disclosure. *Psychoanalytic Quarterly*, **64**, 466-495.
- Remer, P., Roffey, B. H., & Buckholtz, A. (1983). Differential Effects of Positive Versus Negative Self-involving Counselor Responses. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 121-125.
- Reynolds, C. L., & Fischer, C. H. (1983). Personal versus professional evaluations of Self-disclosing and Self-involving counselors. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 451-454.
- Simonson, N. R. (1976). The impact of therapist disclosure on patient disclosure. *Journal of Counseling Psychology*, **23**, 3-6.
- Simonson, N. R., & Bahr, S. (1974). Self-disclosure by the professional and paraprofessional therapist. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 359-363.
- Strean, H. S. (1988). *Behind the Couch: Revelation of a Psychoanalyst*. John Wiley. 岡野憲一郎訳 (1993). ある精神分析家の告白 岩崎学術出版社.
- Vavrinak, R., & Lunnen, K. (2012). Effects of client violence on therapeutic self-disclosure in correctional and non-correctional settings. *Psychology Research*, **2**, 381-395.
- Watkins, C. E., & Schneider, L. J. (1989). Self-involving versus Self-disclosing counselor statements during an initial interview. *Journal of Counseling and Development*, **67**, 345-349.